

平成二十八年年度 福祉作文コンクール  
最優秀賞 「私の夢」

釜石市立釜石東中学校

三年 佐藤 文香（さとう ふみか）

私は障害者が世界から受け入れられ、幸せに暮らせるようになってほしいです。

私には、九歳も歳が離れた兄がいました。兄は五年前のあの日に、家に居て津波の犠牲になってしまいました。一番上の兄でした。兄はダウン症という知的障害を持っていました。兄は特別支援学校という少し特別な学校に通っていました。そして、その学校の寄宿舎で生活してました。そこでは、勉強するのはもちろん、少しずつ自立するための家事や作業を練習してました。学校行事は私達と同じようにあります。その学校には、ダウン症の子以外にも、自閉症の子や、体が弱く寝たきりの子、手足が不自由な子など、たくさん生徒がいました。兄は学校が大好きで、運動会や文化祭のときなど学校行事があるときは、いつも楽しそうに家を出ていくのです。そして、週末に家に帰ってくると、学校のことをたくさん話してくれました。勉強もとっても楽しそうでした。学校の陶芸教室では、マグカップや小さな鉢を作って、祖母によくプレゼントしてました。小さい頃は私ともよく一緒に遊んでくれました。決して怒ることがない、おだやかな人でした。私は、兄に対してダウン症だという意識はありませんでした。周りもそういう感じなんだろうと思っていました。でも、そうではありませんでした。

ダウン症などの障害を持った人に対して、「きもちわるい」「バカ」「おかしい」などという言葉で平気で言う人がいます。本当にそうなのでしょうか。私はこういう言葉を平気で言う人が許せません。「障害者」ということで、その人についても知らないのに、平気でこういう言葉を投げかけるからです。彼らは確かに、言葉がうまく話せなかったり、人に迷惑をかけるようなこともしてしまいます。でも、それ以外は私たちと何一つ変わりません。私たちが言われて傷つく言葉で、彼らも同じように傷付きます。

少し前に相模原市で起きた事件で、容疑者が言った言葉「障害者なんていなくなればいい」容疑者の心ない言葉に、私は怒りを感じました。殺害された入居者と兄を重ね合わせて考えてしまいます。もし兄がここに入居していたらと思うと悲しみを通り越して、怒りの感情でいっぱいになります。家族からしてみれば、障害なんて関係ありません。「障害者」という意識はありません。一人の人間として、一人の家族として、必ず誰かに必要とされて、誰かに望まれて生まれてきたんだと、私は思います。

兄と過ごした九年間は、私にとって大切な思い出です。兄は私にとっても大事な人です。障害を持つ人でも、健常者でも、その人を大切に思っている人は、そんなことはどうでもいいのです。障害を持つ人は、できないこと、苦手なことがたくさんあります。でも、何に対しても一生懸命で、絶対に手を抜くことはありません。それをたくさんの人に知ってもらい、障害を持つ人たちの偏見をなくしたいのです。

私には、夢があります。それは、兄を支えてくれたような、特別支援学校の先生になることです。支援学校の先生になるということは、通常の学校の先生になる以上に難しいことだと思います。言葉がうまく話せなかったり、自己表現が苦手だったりいろいろな人に教えることは大変だと思うけれどそれ以上に一緒に勉強して、少しでも何かできるようになったらやりがいを感じると思います。

だれもが安心して、幸せに暮らせる世界を私はつくりたいです。そのために今自分ができることを考えていきたいです。

平成二十八年度 福祉作文コンクール  
優秀賞 「高れい者や障がいを持つ人のために」

釜石市立釜石小学校

四年 高橋 生樹 (たかはし いぶき)

ぼくは、毎日の生活の中の色々な場面でお年よりに会うことがあります。そこでぼくは、お年よりに会ったら、

「おはようございます。今日もがんばってください。」

と、あいさつしたいと思います。

もしも、バスの中でお年よりに会ったら、席をゆずってあげるようにしたいです。ぼくがこのように思ったのには、わけがあります。

大つちまでバスで出かけたときのことです。おばあさんに、わかい女の人が席をゆずってあげていました。その女の人はおばあさんに、

「どうもありがとうございます。」

と言われて、とてもうれしそうでした。ゆずった人もゆずられた人もうれしくなるなんて、すばらしいことだと思います。

そこでぼくも、少し勇気を出してみました。次のバスでいでおばあさんが乗ってきたので、

「席、どうぞ。」

と少しづつながら言いました。おばあさんは、

「ありがとうございます。」

と聞いて、ぼくにおかしをくれました。ぼくは、ほっとして少しにっこりしながら手すりにつかまっています。

バスをおりるときです。運転手さんに、

「君、名前はなんていうの。」

と聞かれたので、

「生樹です。」

と答えました。すると運転手さんは、

「生樹君、ありがとう、お年よりに親切にしてくれて。このまま、高れい者にやさしくしてね。今日はありがとう。」

またおねがいね。」

と言ったにっこりわらってくれました。

そのとき、乗客のみなさんからはくしゅがおこりました。頭を下げバスをおりようとすると、乗客の一人がアメをくれながら、

「これからがんばってね。」

と言ってくれました。ぼくも小さな声で、

「はい。」

と答えました。人に親切にすると自分にも返ってくると、ぼくも分かることができ、良かったです。

ぼくは、このことがきっかけで、お年寄りのほかにも障がいを持つ人への手助けについても考えるようになりました。

ぼくの周りには障がいを持った人はあまり多くありませんが、学校でキャップハンディ体験の学習をしたときに障がいを持つ人の気持ちがいかに少しかかりました。

目が見えない、耳が聞こえない、体が自由に動かせないということ、すぐ不安になるし、周りにきけんがないかいつも考えていなければならぬのでとてもきんちょうしてつかれると思います。それと、車いす体験では車いすは使う人も大変だけど、サポートする人も大変だということが分かりました。指示の出し方や方向転かんの仕方、だん差があるところでの持ち上げ方など、すぐつかれました。

でも今、ぼくたちの周りには、障がいを持つ人がくらしやすい工夫が、たくさんされています。テレビでは、手話ニュースや字幕を入れた放送がされています。道路には点字ブロックや音の鳴る信号などがあります。車いすのためのスロープもいろんな建物で見かけます。障がいのある人もない人も、同じようにくらしたいける楽しい町ができています。日本代表の選手のみなさんががんばっている姿をテレビのニュースで見ると、ぼくの方が元気や勇気をもらっていることに気づきます。

だから、ぼくはこれからも自分のできるはんで、お年よりや障がいを持つ人の力になれるようにがんばっていききたいと思います。

平成二十八年度 福祉作文コンクール  
優秀賞 「生まれてくる赤ちゃんへ」

かま石し立甲子小学校

二年 森 真心 (もり こころ)

「えっ。お母さん、ほんとうなの。」

わたしは、きょうだいがいなかったの、お母さんから  
「赤ちゃんができたよ。」

と言われたとき、なみだが出るくらいうれしくて、大きな声でよろこびました。

お父さん、お母さんといっしょにびょういんに行ったとき、おなかの赤ちゃんとはじめてあいま  
した。赤ちゃんは、なんだかうちゅう人みたいに見えました。でも、とってもかわいくて、わたし  
を見てわらっていてうれしかったです。

「早くおなかから出てきて、いっしょにあそぼうね。」  
と、心の中で声をかけました。

わたしは、赤ちゃんができるずっと前から、おねえちゃんになったら何をしたいかたくさ  
んきめていました。ミルクをあげたり、ヨーグルトをあげたり、ないたときにはだっこをします。  
おむつもかえてあげます。ようちえんに行ったら、おむかえもします。きょうだいでおそろいのふ  
くをきて、いろいろなどころにあそびに行きたいです。まだまだしてあげたいことがたくさんある  
ので、今からとても楽しみです。おねえちゃんになることが分かってから、わたしは一年生のとき  
よりもお手つだいをがんばるようになりました。ごはんをたべおわたときには、おちゃわんをな  
がしまではこんでいます。お休みの日には、お母さんのおりょうりを手つだったり、せんたくもの  
をほしたりたんだりもしています。

お母さんに、

「ありがとう。とってもたすかるよ。」

と言われたときは、うれしくてつぎもがんばろうと思います。

おばあちゃんにも、

「お手つだいががんばっている真心は、きっといいおねえちゃんになるね。」

と言われたときは、何だかはずかしい気もちになりました。でも、おねえちゃんになれたようで、  
とてもうれしかったです。

ある日お母さんが、大きなおなかをなでて、赤ちゃんに話かけていることがありました。  
わたしは、

「お母さん、赤ちゃんに話をしているけど、赤ちゃんには声が聞こえないんじゃない。」と言いまし  
た。すると、お母さんは、

「じつは赤ちゃんはね、おなかの中でいろいろなことを聞いているの。だから真心の声もしっかり  
聞

いているんだよ。」

とおしえてくれました。わたしがびっくりしているとお母さんが、

「真心が赤ちゃんでお母さんのおなかにいたときも、たくさん話しかけていたんだよ。やさしくて、  
げんきな女の子に生まれてくるんだよってね。」

と話をしてくれました。  
この話を聞いたとき、わたしが生まれるときもお母さんは、やさしく話しかけてくれたんだなあ  
とうれしく思いました。

お母さんは、おなかが大きくてたいへんそうなときでも、まい日、家のおしごとをがんばってい  
ます。休みの日には、いろいろなどころにもつれて行ってくれます。学校のぎょうじにも来てくれ  
ます。

そんなお母さんにありがとうを言いたいです。

もうすこしで赤ちゃんが生まれます。わたしは、やさしくて何でもおしえてあげられるおねえち  
ゃんになりたいです。そして、お母さんみたいに、何でもがんばるつよいおねえちゃんになりたい  
と思います。

だから、あんしんして元気に生まれてきてね。おねえちゃん、楽しみにまっているよ。

# 平成二十八年度 福祉作文コンクール

## 佳作 「ありがとうの言葉」

釜石市立甲子小学校

四年 菊池

音乃 (きくち のんの)

私は、「ありがとう」という言葉が大好きです。なぜかというところ「ありがとう」の一言だけで、お礼の言葉が言えるし、相手の気持ちが良くなると思うからです。

私は、友達とけんかをしたとき、

「ごめんね。これからは、仲良くしようね。」

と言いました。友達はなんて言ってくれるか少しどきどきしました。でも、

「あやまってくれてありがとう。私も悪かったよ。」

と言ってくれてほっとしました。相手も私に対していい言葉でお礼のように返してくれたからです。そしてなぜ「ありがとう」という言葉が人をいい気持ちにさせるのか、ふしぎになりました。

「ありがとう」を国語辞典でも調べてみました。意味は、「感しゃの気持ちを相手に言う言葉」と書いていました。

また、道とくの本には、もとの言葉は「有り難し」で「有ることがむずかしい」や「この世にめったにないほどずばらしいもの」という意味があって、そのようなことにめぐり合えたことへの感しゃを表す言葉と書かれていました。

私の心の中は、

『ありがとうは、すてきな言葉だなあ。ありがとうの言葉が大好きだなあ。』  
という気持ちでいっぱいになりました。

それからの私は、いつも、先生や友達にやさしく「ありがとう」「ありがとうございます」と言うようにしています。だから、相手の人はその言葉を聞いて安心した気持ちになってくれたらうれしいです。

今年の夏はリオオリンピックがありました。私も卓球の競技を見ましたが、気づいたことがあります。メダルも取ってすごいと思いましたが、選手が、

「ありがとう。」

とかんとくやコーチに言っていたことです。かんとくやコーチに言う「ありがとう」は、教えてくれてありがとう、しどうしてくれてありがとうという意味があると思います。

私もバレーボールを習っています。だからチームメイトやかんとく、コーチ、家族に、「ありがとう」「ありがとうごさいました」とせっきよく的に言って、感しゃの気持ちをもちながらバレーボールをしたいです。

以前は、誰かに何かをしてもらった時に、うっかり言わなかったこともありました。そんな時、お母さんや、おばあちゃんに、

「ありがとうは？」

と言われたことがあります。しかし今では、自分から、進んで言えるようになりました。お母さんやおばあちゃんにくり返しよびかけられたからです。「ありがとう」の言葉はすてきな意味をもつ言葉なので、とても大好きです。

これからも「ありがとう」の言葉は相手の気持ちを良くし、たくさんのすてきな意味をもつ言葉だと思おうのでたくさん使っていきたいと思います。

平成二十八年度 福祉作文コンクール  
佳作 「いのちの対話」

岩手県立釜石商工高等学校

一年 岩間 美月（いわま みつき）

グループホームに入居しているひいおばあちゃんの認知症がここ一・二年で急速に進んでしまった。以前は会いに行くとしても喜んでくれ、笑顔で見送ってくれていた。それがいつしか私のことが解からなくなり、会いに行っても反応がうすれてしまった。大好きな笑顔も消えてしまった。私の知っているひいおばあちゃんではなくなったみたいで、とても寂しかった。そういう病気だと分かっていたながらも、悲しくて切なかった。こんなことがあってから私は、忙しさを理由に面会にはしばらくの間行かなかった。「行ってもどうせ私の事解からないしなあ。」とグループホームから足が遠のいていった。そんな時今年の冬ひいおばあちゃんは激しいお腹の痛みで入院した。心配で見舞いに行くと、何か謔言を言いながらベットに横たわっていた。「おばあちゃん、おばあちゃん。」と声をかけても最初は返事もなく、苦しそうにうめき声をあげているだけだった。それでも私は必死に声をかけ続けた。すると、ずっと握っていた私の手をぎゅっと握り返して「ああー」と言った。それは確かに「おばあちゃん。」という言葉に反応して答えてくれたものだった。一生懸命に生きるひいおばあちゃんの姿を見て、私は思わず涙がこぼれてしまった。そんな私の気持ちも伝わったのだろうか、目を開き、私を見て急に微笑んだのだ。びっくりした、驚いた。私はひいおばあちゃんも何も解からなくなってしまうたと思っていたが、それは違っていた。おばあちゃん自身の心は少しも変わっていないかったのだと初めて気付いた。たとえ記憶がなくなっても、身体が不自由になつたとしても心はひいおばあちゃん自身そのものだった。認知症になっても心は通じるものだと知った。その感情は頭ではなく、いのちで感じるものなんだと思った。もしかしたら私は、何も解からなくなってしまうたひいおばあちゃんに会うことで、自分が傷つくのを恐れていたのかもしれない。それは、自分の感じ方ひとつだったのに。強い生命力でグループホームに戻ることができたひいおばあちゃんは今、穏やかな日々を過ごしている。陽のあたるロビーでこっくりこっくり居眠りをしたり、生まれたばかりの赤ちゃんのように思うがままに生きている。そんなひいおばあちゃんを私は微笑ましく思う。家族はもちろん、支えてくれるホームの職員の方たちの温かさがちゃんとひいおばあちゃんに伝わっているのだと思う。これからも、ひいおばあちゃんの認知症の進行を止めることはできないだろう。たとえ会話ができなくても、私はいのちの対話をしようと思う。心と心はずっとつながっている。大切なことに気づかせてくれたひいおばあちゃんにこれからは時間を見つけてたくさん会いに行こうと思う。

平成二十八年度 福祉作文コンクール  
佳作 「祖母のリハビリ生活」

釜石市立唐丹中学校

一年 中居林

優斗（なかいばやし まさと）

僕の、祖母は平成二十四年に祖父と海の仕事に行こうとして、船で倒れてしまった。僕は、どうして倒れてしまったのかとても気になっていた。病名はくも膜下出血だった。くも膜下出血とは、脳の表面をおおう膜のひとつである、「くも膜」の下に出血があるという状態だと分かった。原因が分かって、すぐに手術にとりかかった、十時間にもおよぶ、大手術だった。結果は成功だった。手術が成功に終わり、僕はとてもうれしかった。治るか、とても心配だったが、医師のおかげで、一命を取り留めることができた。

しかし、二週間後、脳梗塞という病気になった。そして、脳の左半分が死んでしまい、言語障害と右手の麻痺が残ってしまった。

それでも、祖母はあきらめなかった。盛岡のリハビリテーションに転院した。毎日しっかり、リハビリをして四ヶ月間頑張った。リハビリテーションでは、歩行練習や指先を動かす練習や階段の上り下りなど沢山のリハビリをやった。動かなかった体が、少しずつ動くようになった。はしも持てなかったが、右手で持てるようになった。自分で食事やトイレなどもできるようになった。リハビリにより、回復が見られ、介護とはとても素晴らしいと思った。

自宅に帰ってきてからは、言語の先生が来て週に一回、口の動きや簡単な言葉を話す練習から始まった。毎週出る宿題も、しっかりやって数字や漢字も書くことができるようになった。そして、「おはよう」や「どうも」など、基本的な会話を少しできるようになった。人の話を聞いて行動をしたり、話を聞いて、うなずいたりもしている。リハビリのおかげで、こんなにも回復できてすごいと思うし、祖母自身もリハビリをあきらめずにやってすごいと思う。そして、もっとあきらめずにやって、もっと話せるようになってほしいと思う。

今では、デイサービスにも通っている。デイサービスは、九時三十分におかえに来て、食事やお風呂やレクリエーションなど、色々なことをしている。友達もできたりして、祖母はいつも楽しく過ごしているようだ。これからも、デイサービスに楽しく通ってほしいと思う。デイサービスには、週に二回通っている。たまに、歌手や有名人なども来る。その度に楽しんでいるようだ。祖母が、しゃべられないことへのストレスが解消になるといいと思う。

話すことができなくても言いたいことなどを理解して生活していききたいと思う。僕は、祖母のために気を利かせて色々やってあげたり、祖母が少しでも楽しくなるようなことなどをやってあげたいと思う。

体の不自由な祖母のような人は、他にもたくさんいると思う。僕達中学生は、体の不自由な人たちにやってあげられることがあると思う。例えば、目が見えない人なら信号で声をかけてあげて誘導してあげたり、耳が不自由な人に、口の動きや身振り、手振りで必要なことを教えることや公共の場で席をゆずることもできる。

これから、町に行ったときに体の不自由な身近な方々に協力していききたい。協力することが、どんな意味をもつことになるのか。しっかり考えたうえで協力していききたい。それが体の不自由な身近な方々への「協力」ということではないか。僕は、そう思う。

# 平成二十八年度 福祉作文コンクール

## 佳作 「福祉について見直す」

釜石市立釜石東中学校

三年 高

彩世（たか あやせ）

私にとって福祉はとても身近な存在だと思っています。私の母は、介護施設で働いていて、私も将来福祉関係の仕事で働きたいという夢があります。

私のおばあちゃんは、数年前から、こしが曲がっていたり、足が不自由になってしまったり、車椅子を使ったりしています。それに、母が働いている介護施設に入って週に一度だけ施設に行き、お風呂に入ったり、買い物をしたりしています。だんだんこしが曲がっていくにつれて、ご飯もあまり食べれなくなってやせていってしまい、声もかすれるようになってしまいました。私は、なぜ、あんな風になってしまったのか全く理解ができず、毎日のように、できないことを私にたのんだり、小さい声で文句を言ってくるおばあちゃんにすごくイライラしていました。それに、おじいちゃんまでも、イライラしている私に、おこっています。

でも、私のそんな気持ちが変わる事がありました。それは、二十四時間テレビです。見ようなんて気持ちは、あまりなくて、ただテレビを流していました。ですが、ある女の子の物語が始まったとき、おばあちゃんが、目に涙をためていました。私は、びっくりしてテレビを見ました。すると、小さい頃から、だんだん体の筋肉がおちていってしまう女の子の話でした。その女の子がかなえた夢をお昼寝アートの描いていました。その動画を見た後、私も泣いていました。二十四時間テレビが終わった後、おばあちゃんに対する気持ちが変わったんだと思います。毎日、私にたのんでいたのは、自分でやりたいのに、できないからなんだなと思いました。また、母はずっと前から介護の仕事についています。ケアマネジャーという仕事をしていて、直接高齢者の方とは、あまり関わりが少ないようですが、おばあちゃん達を施設に入れる手伝いをしたり、担当者さんの気持ちとかをゆっくり聞いたりすることは、忙しいけど、とてもやりがいがあるそうです。たまに、施設の利用者さんの家に訪問したりすると、暴言をはかれることや、来なくていいと言われることもあるそうです。私は、それを聞いたとき、びっくりもしましたが、それよりも、よくたえられるなど思いました。私だったら、すごく悲しい気持ちになるし、この仕事したくないと思います。なぜ大丈夫かは、聞いていませんが、利用者さんの気持ちをよく分かっているんじゃないかなと、かってに考えています。

お母さんに仕事の話をしてもらったり、おばあちゃんに対する気持ちが変わったたりすることで、福祉について、よく考えさせられました。私は、将来つきたい職がころころ変わっていました。でも、東日本大震災があったときの、悲しんでるおばあちゃんたちに接するお母さんの姿を見て、初めてお母さんのような仕事につきたいと感じました。それからずっと保健師という夢があります。だから、今回の話は、私がさらに保健師になりたいという気持ちが深まる良い機会になったと思います。今は、台風十号のえいきょうで、多くの人が悲しい気持ちになっています。だから私にできることがあれば積極的に参加できればいいと思っています。これから、お母さんの背中を追って頑張りたいと思います。

平成二十八年度 福祉作文コンクール

佳作 「介護について」

岩手県立釜石商工高等学校

一年 菊地 月（きくち るな）

私の母は、介護の仕事をしています。いつも母は疲れて帰って来ます。そんな姿を見て私は、「おじいちゃん、おばあちゃんは可愛いけど介護は絶対したくない。」と正直思っていました。でも帰って来ると施設での話を楽しそうに話してくれる母にそんなことは言えませんでした。

そんな私と母の会話によく出てくる一人のおばあちゃんがあります。おばあちゃんは、とてもユーモアあふれる方で話を聞いてるだけでも笑顔になりました。しかし、そんな方でも急に怒って暴れたり叩いたりといったことをします。それでも母は、この仕事をやめません。私はだんだん、そんな母をカッコいいと思うようになりました。

そんなある日、私の気持ちが一気に変わる出来事がありました。それは、盛岡に向っていた時のことです。道路の真ん中にバイクがあり歩道には一人のおじいちゃんが座っていました。その状況を見て、私でも何があったか分かりました。そんな中、一台も止まる車はありません。信じられない。そう思いました。しかし、そこで止まったのが母でした。おじいちゃんに駆け寄る母を車の中から見つめていました。その時私は、「カッコいい。」この言葉しか口から出ませんでした。それと同時に絶対にしたくないと思っていた介護をしたいと思うようになりました。母が車に戻って来た時、素直に口から「カッコよかったよ。すごいね。」と言うことができず。それに対して母は、「ほっとくとかありえない。」と言いました。母はやっぱり尊敬すべき人です。

高齢化の続いている最近、必要になってくるのは、介護が出来る人、場所そういったものではないかと思っています。介護に疲れてなどといった理由だけで命を奪ったり、暴力したりなどといったことがニュースになると、高齢者の方も不安になってしまいます。だから、家庭での介護でも一人だけに任せずに、家族で向き合ってあげることが大事だと思います。もし、自分が将来介護される側になった時、急に命を奪われたり、暴力されたりしたら誰だっぴやなはずです。いざ自分がと考えられれば、そういった悲しい事件もなくなるのではないのでしょうか。

高校生の私に出来ることは限られます。実際に介護するのはもちろん無理ですし、母のような行動もできません。でも、近所のおじいちゃんやおばあちゃんのお話を聞いてあげて話相手になってあげることが出来ます。だからこれからの生活で、近所の方に会ったらあいさつはもちろん、少しでもお話できたらなと思います。そこから自分の将来にもつなげていきたいです。